宗像

沖津宮御神璽迎え

沖津宮を出御される御神璽

十月一日のみあれ祭に先立ち、九月十四日玄界灘の孤島に鎮座される沖津宮の御神璽をお迎えする沖津宮神迎え神事が厳粛に斎行された。

前日の九月十三日、高向権宮司以下神職五名が大島へ渡島し午後五時より明日の渡航安全祈願祭が斎行された。

翌日早朝、御座船となる「沖津丸」（船長・沖西豊幸氏）には、みあれ祭御座船と同様の「国家鎮護」の大幟、「御長手」と呼ばれる紅白の吹流しが掲げられ、船首に「波切り御幣」をつけ御神璽をお迎えする準備が整った。

午前六時、高向権宮司以下神職三名、沖・中両宮奉賛会古賀理会長以下会員、沖中両宮翼賛会田志龍吉役員、宗像漁協田志正弘理事他総勢十名で大島港を出港。薄曇の天候であったが海上は凪、同八時無事沖ノ島へ到着した。

到着後、直ちに海中にて禊をし、沖津宮本殿にて出御祭が斎行された。神職が御神璽を捧持し、御祓いをしながら参道を下り御座船

御座船へ運ばれる御神璽

遷宮で結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

10月祭事暦

1～3日 秋季大祭

15日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
午前11時～
総社祭
豊栄舞奉奏

17日 表千家献茶祭
午前11時～

宗滴

天の虫と書く蚕は、その美しい糸により古代東洋と西洋を結び付け宗教をはじめ、さまざまな文化・産業が交流し文明は発展してきた▼日本書紀によれば、応神天皇の御世、中国の「呉国」より機織技術者である縫工女、兄媛・弟媛・呉織・穴織の四媛が大和朝廷の求めにより来朝。その中の兄媛は、宗像の地に留まり縫殿を建て御衣を宗像大神に奉献される。この大神への御奉仕から、各地に機織・織縫の技が伝播したといわれている▼「呉服」の名称はくれはとり・といわれ、「呉国」の織り方によって織り出した絹織物とされる。この呉服の神とされる縫工女、四媛は遥か中国・「呉国」に繋がる玄界灘を望む福津市奴山の縫殿神社に祀られている▼明治の頃、殖産興業の政策のもと蚕糸業は発展。我国の「原料」（桑）・「技術」のみで輸出できる産業で、外貨獲得に貢献し、文明開化を推し進め日本の発展の礎を築いた▼絹の持つ優雅な光沢、柔らかな感触、この天然素材の美しさは神聖である。当社の、春・秋の大祭には、氏子代表が奉仕する奉幣使より宗像大神に正絹の奉献がつづけられている。（渡）

神具・装束・授与品
井筒
装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

「沖津丸」に奉安、一行は再び大島中津宮へ向かった。

午前十一時半、大島へ到着すると多くの島民が沖津宮の神様を波止場でお迎えした。着岸すると大島駐在のパトカーに先導頂き中津宮迄御神幸、同宮本殿で入御祭が斎行され、本年度の沖津宮神迎え神事は滞り無く終了した。

尚、中津宮本殿内陣に仮鎮座された沖津宮御神璽は、中津宮の御神璽と共に十月一日海上神幸され、お迎えされる辺津宮御神璽と年に一度の再会を果され、総社・辺津宮内陣に三宮の御神璽が奉祀される。

無事中津宮へ入御される沖津宮御神璽

第11回 中堅社員研修・宗像研修

出光興産株式会社 人事部教育課

九月五日から七日までの三日間、第十一回中堅社員研修の宗像大社研修を実施させていただきました。今回の研修には日本国内各事業所の社員三十三名に、中国とノルウェーの駐在員を加え、総勢三十五名が参加致しました。

宗像大社研修は、「日常生活と離れた神域に身をおくことで感性を高めること」「創業者・店主出光佐三が多大な影響を受け経営の原点とした日本特有の伝統文化に触れその思いを感じ取ること」の二つを目的としています。

研修はまず白衣白袴の着付けと祭式作法についてご指導いただきました。ほとんどの参加者が初めての経験でしたが、懇切丁寧にご指導いただくことにより、何とか習得することができました。神職の方と同じ装束となり、作法を実践していくことにより、ますます神域に身を置いているという実感が高まってきました。

今回も、班ごとに神職の皆様に入っていただき懇談をする機会をいただきました。神道や宗像大社に関する様々な疑問に分かり易くお答えいただくとともに、神職の皆様の日常生活に至るまで詳しくご説明いただきました。参加者からは、「もっと時間を長く取ってお話しを伺いたかった」との感想が多く聞かれました。是非次回以降もお願いしたいと存じます。

この他、境内清掃・日供祭・神宝館見学・御由緒の説明・中津宮参拝・高宮での鎮魂があり、参加者は、真正面から神道と向き合い、宗像大社の御神徳を感じることができました。宗像大社の荘厳さとお世話いただきました皆様の真心に触れ、こころ洗われる二泊三日の研修でした。

参加者からは、「非日常的な神社という場所に身を置くことにより、日常業務から頭をリセットし、研修に臨むことができた」「創業者の店主が日本や日本人を愛した背景が分かった」という感想が数多く寄せられました。中堅社員研修のはじめに宗像大社で研修させていただいてよかったと存じます。

中津宮を参拝

ただく意義が十分伝わっていることが確認できました。また、「神社はこれまで神頼みの場でしかなかったが、日本文化を凝縮し、道徳の柱となる日本精神の中心的な存在であることが理解できた」と神道の本質に触れ、この研修を機に神道や日本の伝統文化に興味や親近感を抱いた参加者も多かったようです。貴重な機会をいただき、宗像大社の皆様には心より感謝申し上げます。

最後に、宗像大社の益々のご繁栄をお祈り申し上げ、研修の所感とさせていただきます。

最終日、職員の見送りを受ける研修生

開講挨拶する葦津禰宜

全日程研修に参加された高河総次長

各班ごとに行われた神職との班別研修

平成20年度 学芸員実習を開催

去る八月十八～二十八日まで、当大社神宝館において学芸員実習が行われた。学芸員資格取得を目指す県内外の大学生七名が参加し、連日、実務に要する知識や技術の習得に励んだ。

学生は毎朝、当大社職員とともに朝拝に参列、心身を祓い清めて実習にのぞんだ。初日の開講式において、学生は皆緊張の趣であったが、続く堤文化財管理事務局長による神道と神社について説いた講話を聴講すると、馴染みの無い環境への不安が解かれたのか、笑みも浮かぶようになり、その後は終始快活良く実習をこなしていった。

当大社実習は内容に富み有益であるという定評を頂いている。今年度のカリキュラムも、例年同様、諸先生方の講義や資料を扱う実務などから成る盛りだくさんの内容であった。内訳を述べると、①古代の沖ノ島祭祀のあり方を説く考古学（講師：松本肇氏）、神社奉納の絵馬について学ぶ民俗学（楠本正氏）、当大社所蔵文書から中世の宗像大宮司家の動向を紐解く歴史学（河窪学芸員）、当大社神宝館の運営の特異性を紹介する博物館学（重住学芸員）などの講義、②刀剣の手入れ法（藤川宣重氏）や沖ノ島植物標本の展示、阿弥陀経石の模刻木版の採拓（重住学芸員）など文化財の取り扱いと調査方法の実習、③周辺の注目される公立博物館の見学（石井忠氏ほか）、④文化財行政の講義と現場見学（宗像市）⑤大島史跡探訪 等々である。

刀剣の手入れ実習

学芸員はよく「雑芸員」ともいわれる。この表現は、雑務の中に身を置きながらも地道な学術活動の積み重ねが求められる実情からきている。実習中、学生は学芸員が行う実務の範囲の広さ、量の膨大さに大変驚いていた。心身がタフでないと勤まらないことを体感し、華々しいイメージとは程遠い現実の厳しさを実感しつつも、実習が終わる頃には、学芸員の仕事の意義深さに感銘し、学芸員はやりがいのある素晴らしい職業として映り始めた様子であった。学生には本実習で見聞したものをこれからの飛躍につなげてもらえれば誠に幸いである。

これからも、優秀な学芸員が誕生することを祈って有意義な指導に努めていきたい。最後に、実習実施にあたりご協力頂いた皆様に御礼申し上げます。

宗像市田熊石畑遺跡での発掘作業の様子

第32回 東西神社人野球大会

太宰府天満宮・宗像大社の連覇

東京・神宮球場で開催

当大社と太宰府天満宮の混成チームによる参戦で三年目となる第三十二回東西神社人親善野球大会が、八月二十八～三十日に東京で開催された。

プロ野球の公式戦、東京六大学のリーグ戦も行われる見事な神宮球場での試合、一対〇のサヨナラ勝ち、一打逆転サヨナラ負けのピンチを制し、当大社・太宰府チームが連覇を達成した。

上京した初日は、明治記念館で歓迎会が催され、全国から六チーム約一六〇名が出席、松山東京大神宮宮司、東京都神社庁平岩代々木八幡宮宮司らが挨拶された。

また翌日に控えた野球大会の抽選も行われ、対戦相手が決まるごとに歓声が上がったが、外はゲリラ豪雨。野球は困難と思われる状況であった。

当日、雨は明け方に止んだが、いつ雨が降り出してもおかしくない状況の中、開会式が行われ、試合が開始された。

当チーム初戦の相手は出雲・金比羅チーム。当大社からは、大塚（一塁手）・長友（二塁手）・壱岐（外野手）が初戦に出場した。

試合は、相手投手、神島・崇（太）両チームエースの好投で、〇対〇のまま最終回。

長友（宗）がライト前ヒットで出塁、すかさず盗塁、三番吉武（太）が初球をレフト前に放ち、劇的なサヨナラ勝ちをおさめた。

決勝戦は開催地の東京チームとの対戦、この時間帯になると晴れ間も見えだし、役員・全チームが注目する中開始された。

当大社からは初戦出場の三選手に加え、吉野（外野手）が先発、船越（ピンチランナー）も出場した。

先発吉武（太）と相手投手の緊迫した投手戦となったが、四回表四番大塚（宗）の三塁打を皮切りに四連打、更に押出しフォアボールで三点を先制。しかしすぐさま、東京チームに三点を返され同点にされる白熱した展開となる。

最終回先頭打者の吉野（宗）が内野安打で出塁、ここで俊足の船越（宗）が代走に送られ、二盗、次打者のヒットで三塁まで進み、次打者の内野ゴロの間にホームへ突入、クロスプレーとなるも生還し、見事勝ち越し点を奪った。

その裏の相手チームの攻撃、途中からマウンドに上がっていた大塚（宗）が奮闘するも、東京チームも粘りをみせツーアウト満塁、一打逆転サヨナラのピンチを迎えるも、最後のバッターはショートライナー。太・宗チームがかろうじて逃げ切り、昨年の福岡大会に続く連覇で野球大会は幕を閉じた。

尚、最優秀選手賞（MVP）には、投打にわたる活躍をみせた吉武（太宰府天満宮）が選出された。

祝勝会の行われた夕方からは再びゲリラ豪雨、日中も全国的に雨で神宮球場のある渋谷の局地的な晴れ間には、一同御神慮を感じた。

最終日は靖國神社を正式参拝、遊就館を拝観し、各々帰路についた。来年は第六十二回式年遷宮を控える伊勢の地で開催されることになっている。

優勝の瞬間、思わずガッツポーズがでました

優勝旗は、また九州へ渡りました

決勝点はクロスプレーでした（船越出仕）

役員として観戦された各神社の宮司様方

世界遺産活動報告

『宗像・沖ノ島と関連遺産群』

～世界遺産の目的と課題～

宗像市役所 秘書課

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が世界遺産として登録された場合どうなるのでしょうか。

これまでも、宗像大社は、交通安全の神様として広く世の中に知られ、正月の参拝集客数一つとっても福岡県内で三位の集客力があります。しかし、そのほとんどの参拝者が訪れるのは、辺津宮だけで終わっていて、宗像大社＝辺津宮との認識をもたれている人は多いようです。宗像大社の本質まで踏み込んで理解して参拝する人は、ごくわずかで神宝館に来られてはじめてその奥深さを認識するといった状況です。

世界遺産登録の目的は、沖ノ島や宗像大社の本質部分を如何に広く日本に、そして世界に知らせ、遺産価値の共有を図っていくことで、将来にわたり保護保存を推進することにあります。

地球上においてこの沖ノ島は、ただの島ではありません。黄河文明から育まれた東アジアの先進地域から文化や技術を取り入れ、倭（日本）という一国の島国が成長していく過程を、この沖ノ島は見守り続けました。国宝約八万点の資料はそのことを語ってくれています。もし、沖ノ島が無ければ日本の歴史は、大きく変わっていたかも知れません。

沖ノ島を中心に関連する宗像大社や古墳群が、本遺産の範囲です。その中には、大島の中津宮、沖津宮遥拝所を含み、宗像本土では、辺津宮をはじめ、沖ノ島祭祀に深く関っていた古代豪族胸形氏（宗像氏）の資産として東郷高塚古墳・桜京古墳・津屋崎古墳群を範囲としています。

世界遺産に登録されると一気に観光客が増えます。他の遺産を見てみますと観光誘致を目的で世界遺産登録を目指すところも多いようです。また、世界遺産になった後の観光被害も数多く見受けられ、世界遺産に登録されることが遺産の破壊を招くといったところもあるようです。この状況を本遺産に当てはめますと、本遺産の本質的なところは、神聖性です。ここでいう神聖性とは、本来、神の領域とし、人が踏み入ることのできない場所のことで神宿る島である沖ノ島の本質を指します。現状では、十分神聖性は保たれていますが、世界遺産になった場合、その神聖性は保たれるのかという疑問です。例えば、現在、沖ノ島への渡島は年一回の五月二十七日のみでありますが、この渡島の回数を増やせないかという意見もあります。また、沖ノ島に上陸しなくても近海を観光目的でクルージングするという行動が漁場を荒らしてしまうといったことも考えられます。このようなことは、神聖性や真実性を重んじる世界遺産の趣旨からも反しますし、これまで地元漁師が守ってきた沖ノ島への自然発生的な保護体制が崩壊してしまいます。

世界遺産登録を推進する立場として、本遺産の神聖性や真実性を登録した後も、如何に守っていくかを考え、その保護保存に向けて、宗像大社や地域住民、地元漁師、行政が一体となって体制を強化することが求められます。

世界の中で行くことのできない世界遺産は、「沖ノ島」である、といった認識を植えつけることも不可能ではありませんが、行くことができないと聞けば、無理やりにでも行こうとする人が出てくるのは世の常です。だから、沖ノ島は、人類みんなで守っていく必要のある島であるという認識を深め、宗像本土において、しっかりとその神聖性について理解を深めていく努力が必要です。

今回の世界遺産登録の活動は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」といったくくりで文化財を検討するきっかけとなりました。沖ノ島・宗像大社・古墳群は、一見するとまったく別の種類の資産でありますが、組み合わさることでこれまでにない付加価値が導き出されたのです。宗像そして日本の歴史を考える上で世界に誇れる遺産があり、世界遺産の構成資産に入っていない宗像の個々の遺産についてもすべて価値の高いものです。今後も貴重な自然や文化財を保護しつつ、世界に誇れるすばらしい郷土をもつ宗像市を目指し、文化財愛護の精神を次の世代に受け継いでいくことが、恒久的に平和な日本を築くカギとなることでしょう。

新しい御守の御紹介

杜守（もりまもり）

～境内の御神木に新たな命～

境内の御神木で奉製した御守を、本殿・祈願殿で秋季大祭の十月一日より授与しております。

神社の社叢は「鎮守の杜」と呼ばれ、当大社も自然災害等止むをえない場合を除いて、神苑の樹木を大切守っております。

しかし、高宮へと続く参道にある樹齢約四十年の杉六本が立ち枯れし倒れる危険があり、今年の三月に伐採を余儀なくされました。

神社としても、神苑で生を受けた御神木の御霊を永遠なる存在にと、御守として再生致しました。

宮大工が皮を剥いで製材し、神職が一つ一つ焼印を押し、巫女が紐を通し箱詰めし、真心込めて奉製致しました。

宗像大神の神域を守護し続けてきた御神木の御稜威を、ご参拝の皆様にも受けていただければと願っています。

第38回 西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約3000鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が11本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる『菊みくじ』、宗像観光協会の運営する『いっぷく茶屋』なども開かれています。是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

期　間　10月31日(金)～11月23日(日)
時　間　終日
会　場　宗像大社境内
拝観料　無料
駐車場　無料

宗像大社刀剣展開催

菊花の秋恒例の刀剣展を開催します。当大社に所蔵する奉納刀を中心に展示します。沖ノ島祭祀にかかる神宝（国宝）などを紹介した常設展示も併せてご覧いただけます。皆様、是非お越し下さい。

◆日　時
平成20年11月1日（土）～12月1日（月）
午前9時～午後4時半
◆会　場　宗像大社神宝館 1階展示室
◆入館料　大人500円
大学・高校生300円
中・小学生200円
※ 15名以上は1名に付100円引き

なお、展示替え作業のため
会期の前後で休館します。

◆休館日
平成20年10月29日（水）～10月31日（金）
平成20年12月 2日（火）～12月 5日（金）

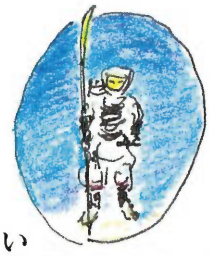
（続）海の寄物

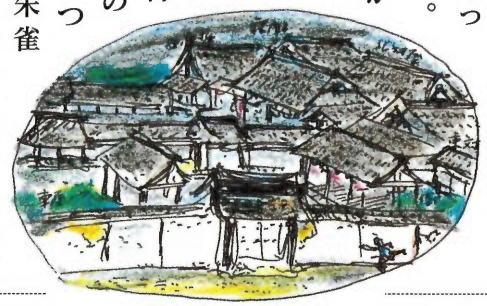
230

いしい ただし

「仮面の告白」展で紹介した仮面の逸話を一つ。古今著聞集の偸盗項にある。

藤原隆房が検非違使別当であった時のことである。都・白河の大邸宅に群盗が押入った。その家に仕えていた侍に腕のたつしっかりものの若者がいた。賊に応戦し、入り乱れて戦うち、いつの間にか、群盗の中に紛れ込んでしまった。群盗は仕事を終えて、朱雀門近くに集まり、盗品を分配し、若者も分け前にあずかった。群盗の首領と思われる者は、格別物腰が優雅で、物言いも品がよく、年は二四、五歳ぐらいで、胴腹巻をして、籠手を当て、長刀を持ち、裾に緋色の括り緒のついた指貫袴を脚高にくくっていた。配分が終り、みなが散り散りになると、侍は首領のあとをつけた。朱雀大路を南へ四条まで行き、四条から東へ曲った。四条大路の検非違使別当邸の西の門近くで、首領の姿が消えた。この邸の土塀を越えて中に入ったようだった。





翌朝早く、昨夜の道を辿り直してみると、地面に点々と血痕がついている。首領は傷を負っていたのである。その血痕は検非違使邸の西の門前までで絶えていた。「この邸の者か」。戻って若者は家の主にそのことを告げた。主は検非違使別当のもとに出入りしていたので、参上してことの子細を告げた。

別当は驚き、まず家中の男どもを厳しく糾問したが、疑わしい者は出なかった。外からの血は、北の対屋の車宿まで続いていた。別当は「局の女房の中に犯人を隠しているに相違いない」と、隈無く捜索、全員が呼び集められた。中に一人だけ大納言殿という身分の高い女房が「風邪を引いて出てこれない」と言ってきたが、別当は人の肩によりかかるなりしても、必ず参上せよと厳しく達した。女房は不承不承出てきた。女房の部屋を捜すと血のついた小袖が出てきた。切板を開けてみると、さまざまな盗品の山が隠されていた。若者の言った通り、緋色の括り緒のついた指貫袴なども出てきたのである。「おもてがた一（ひとつ）ありけるは、その面をして、かほをかくして夜々に強盗をしけるなりけり」（著聞集）

別当は激怒し、検非違使に仰せつけ、白昼に入獄させた。その入獄を見るため見物人が市をなし、身動きできないほどだった。身分の高い女性は外出する時、単衣の小袖を頭からかぶり顔を隠したが女偸盗にそれはさせなかった。「おもてをあらわにして出されけり」見物人達は、女の容姿の美しさに驚嘆の声をあげた。年令二七、八ばかりで、ほっそりとして、背格好といい、髪のおもむきといい、何一つ欠点がない優美この上ない女房だった。

「昔こそ鈴香山の女盗人とていひつたへたるに、ちかき世にも、かかるふしぎ侍（はべり）けることよ」と古今著聞集は結んでいる。

第五六六回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日〆切

宗像市　東旭ヶ丘　天野　玲子
炎天を汗を拭き拭き来し友の帰りにハンカチ忘れてゆきぬ

〔評〕暑かった今年の夏は冷房のきいた部屋が何よりの御馳走。その馳走に酔った友である。ユーモアもある。

北九州市　戸畑区　田中ハツセ
痛みに臥せ十日余となる吾が顔の鏡の中に別人となる

〔評〕我と我が顔の変りざまに驚いた田中さん。初句の字余りが効果的である。佐太郎が、〈逢ふはずのなき斑白の人を見るわが全容が鏡にありて〉と詠っている。

宗像市　田野　森　甲子
「道の駅宗像」が出来嫁と来ぬ獲り立ての鯵は鯛より高値

〔評〕鯛は養殖物？大きさはなどいろいろ想像を呼ぶ作品。嫁の語が作品に奥行きを与えている事も見逃せない。

うきは町　浮羽　向　則正
二歳の孫あづかりてより一週間母を捜さず泣かずたくまし

〔評〕孫の意外な面を発見した驚きとよろこび。一、二、句は「あづかりし二歳の孫は」がいい。

北九州市　八幡西区　吉田ウト子
白煙を立てつつ走る俄雨いっきに醒むる夾竹桃はも

〔評〕夏の俄雨を白雨と呼ぶ、それが一、二句の描写である。生き返えったのは夾竹桃だけでは無い作者でもある。

福岡市　南　区　井田有久衣
ケアルームピアノで「旅愁」弾きいれば友は側にき小声で歌う

〔評〕判り合える友がいることの幸せ。作者とのひとときの心の交歓図である。

福津市　若木台　野間　精一
嬰子を嫁に抱かせて嬉し気に拝殿下りる老夫婦あり

〔評〕初孫の宮詣りであろう。これは一家をあげての喜びである。

福津市　中　央　池浦千鶴子
山の宿朝発つわれら送るがに鶯いくどもいい声聴かす

〔評〕鶯の声は今日の行程への励ましの声でもある。初句は破調になっても「山の宿を」とする。

宗像市　田　久　巻　桔梗
神門の夏越の萱をひと握り抜ききて家の祓ひも済ます

〔評〕私は巫女さんが持ってきて下さる茅で祓をすます不精者。誠実な作者らしい作。ただ「神門」は必要だろうか。

宗像市　日の里　大和美由紀
木洩れ日も両手に掬ひまろやかな山の精気の清水を飲みぬ

〔評〕すずやかな一首に仕上っている。

北九州市　八幡西区　豊田　光子
マラリヤに除隊となりて復員す手帳にて知る夫の軍歴

〔評〕重い戦の現実を付きつける一首。上句は「」を付ける必要がある。

宗像市　光　岡　佐藤　純一
なつかしい恋のメロディー流れつつ愛の糧なる赤いスイートピー

〔評〕註によれば松田聖子の作詞作曲の由。聖子ファンならではの一首。

宗像市　田　久　井上　光
六歳のわれが抱きし骨壷の父よ時には夢に立ちませ

〔評〕作者の抱く骨壷の父は戦死だろうか、深い父恋いのうた。

宗像市　光　岡　森田富佐子
お早うの挨拶交わし笑顔にて歌出来しかと尋ねくる友

〔評〕励まし合う歌の友が身近かに居ることの幸せ。結句は「友は訊ねる」がいい。

宗像市　光　岡　一木　照代
山椒に百舌は蛙を突き刺して苛酷なじきに餌の確保を

〔評〕百舌に同情しながら反撥もある作者の心理。下句は「餌の確保は苛酷と思う」がいい。

選者詠

ジジジジと啼きはじめしがシワシワとならず止めたりどうした熊蝉
一つのみ咲きたる彼岸花にきて何か説きをり蝉の法師が
三度食べ三度仕舞ふは大儀なる俄やもをに法師蝉啼く

第五四一回 俳句作品集

宗像市　東郷　田中　憲象
永き日の墓に剣の露涼し

宗像市　田久　巻　桔梗
孫が来て端居の夕となりにけり

編集後記

野球が終わりました。サヨナラ勝ちに、逆転サヨナラ負けのピンチを乗り越えて、一時はどうなることかと思いましたが、何とか優勝できました▼それにしても神宮球場はすばらしく、マウンドで投げれたことは一生の思い出となりました。公にしておりませんが、マウンドの土とウイニングボールは小生がこっそり賜りました▼さて、現在愚息と一緒に電車（プラレール）に夢中です。飛行機はそれほどでもなかったのですが、電車は奥が深いです。そこで感じたのが、九州の電車はデザイン性が高いです。「つばめ」「かもめ」「ソニック」「ゆふいんの森」・・・。さらに電車博物館も沢山あったり、SLが走っていたりと、こなすべき家族サービスのネタは尽きません▼ちなみに当大社から始まった「交通安全」の崇敬、その最初は明治にまで遡ります。博多～赤間まで敷かれた鉄道、その赤間駅での踏切事故をきっかけとして、今日の崇敬が本格的に始まりました。モータリゼーションで自動車全盛の時代となっても、鉄道関係者の篤い崇敬は今日でも続き、新年最初の交通安全祈願祭は社長以下役員参列の下「JR九州」です。（塚）

発行所 宗像大社社務所 宗像会
〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行 定価1年送料共1,000円